65倍の放射能が降っている！

都内でも4.5倍

福島第一原発1号機 9月 建屋（カバー）撤去で

原子力規制委員会が公表した最新観測数値に専門家が「低線量被ばくが危ない」と緊急警鐘！

時間とともに観測される放射性物質は減っていくはずなのだが、最近、政府のデータで増加傾向が。理由を探ってみると恐ろしい実態が見えてきた……。

「それまで、ほぼ毎時3.5マイクロシーベルト前後だった福島第一原発付近にある双葉町のモニタリングポストの値が、昨年の10月半ばに急に毎時4.1マイクロシーベルトに上がったんです。ちょうど、1号機の建屋カバーの取外し作業をしているころだったので、よく覚えています」

そう話すのは、福島県南相馬市で測定活動を続けている南相馬・避難勧奨地域の会の小澤洋一さんだ。

モニタリングポストとは、その場の放射線量をリアルタイムで監視する測定器のこと。

「その数値も2月はじめくらいまでは高止まりしていました。だから、福島第一原発の作業と何か関連があるのかなと心配だったんです」（小澤さん）

実は、このほかにも、昨秋から現在にかけて、「高くなっている」値があるという。

元東電社員で、福島第一原発から20キロ圏内の浪江町から埼玉県に避難中の桑原豊さんは、「〝定時降下物〟の値も、昨年12月から今年にかけて約4倍に増えている」と警鐘を鳴らし続けている。

定時降下物とは、自然に地面に落ちてくる埃や雨のこと。原子力施設からの排気によって大気中に放出された放射性物質のうち、地表に降下する量を知るために測定する。桶に水をはり、一カ月屋外に設置後、水を測定すると放射性物質の量がわかる。

いったい、どの程度、定時降下物の値が上がったのか。

本誌は、さっそく月間の定時降下物をモニタリングしている原子力規制庁のデータを検証した。

すると、福島第一原発に近い双葉郡では、'16年9月で84ベクレル／㎡なのに対して、'17年1月には、約65倍の5千470ベクレル／㎡に跳ね上がっていることがわかった。

'17年1月の数値は1年前の'16年1月の1千130ベクレル／㎡と比べても約5倍になる。

「原発の構内では、2千ベクレル／㎡を超える恐れのある区域に入るときには、防護服に着替え、ゴム手袋をはめて、靴も履き替えなければなりません。それくらい厳重に管理されているんです。5千470ベクレル／㎡は、その倍以上の汚染。避難解除をして、ここに人を住まわせるということが、いかにリスクがあるかわかるでしょう」

そう危機感を募らせるのは、前出の桑原さんだ。

事故は収束に向かっているはずなのに、なぜこのように降下物の量が増えているのか。

「冬場は乾燥するので土ぼこりが舞いやすいんです。だから、放射性物質が付着したほこりなどが再浮遊して、降下物量が増えているんでしょう。けど、理由はそれだけじゃないと思います。特に、福島県の降下物が'15年に比べて'16年から1号機建屋カバーの解体作業をしていたことが関係している可能性もあります」（桑原さん）

1号機建屋の屋根は、6年前の原発事故の際、水素爆発で吹き飛んだ。その後、放射性物質が飛散するのを防ぐため、東電は'11年10月に建屋にカバーを設置したが、廃炉作業のため、昨年9月からカバーの取外し作業を行っていたのだ。

カバーもないから飛散しやすい

「カバーを取り外すときには、放射性物質が付いた粉じんを吸着させるのりを建屋に噴霧するんですが、噴霧圧でかえって粉じんが舞うことがあるんです。昨年11月にカバーの撤去が終わり、昨年12月からは、建屋内のオペレーションフロアのゴミを大型の吸引器で掃除する作業が始まりました。それで汚染ぼこりが飛散しているんでしょう。1号機は、屋根もカバーもないわけですから、飛散しやすいんです」（桑原氏）

こうした作業の影響だろうか。降下物があるのは福島県内だけではなかった。

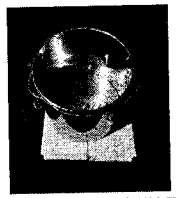
原子力規制庁のデータを見ると、右ページ表以外の場所でも茨城県ひたちなか市で1・51ベクレル／㎡、さらに福島から遠く離れたところでは長野県で0・047ベクレル／㎡が観測されていた（いずれも'17年1月）。

日本分析センターが事故前の'01年に調査した結果によると、降下物量の全国平均は0・026ベクレル／㎡。現在の東京はその70倍もの降下物があることになる。

「事故で関東も汚染されましたから、風に乗って再浮遊したものが落下しているのかもしれませんが、いまだに福島第一原発から放出されている放射性物質も再汚染の要因である可能性もぬぐえません。モニタリングの必要があります」

こう指摘するのは、独自に定期降下物を調査している市民放射能監視センター・ちくりん舎の副理事長、青木一政氏だ。実際、福島第一原発から建屋カバー撤去の影響や再浮遊によるもの以外にも、放射性物質が出続けている。

東電の発表資料によると、1月時点で、1日409億5千600万ベクレルの放射性希ガス（放射能を持つ希ガス）が放出されている。さらに1日54万2千400ベクレルの放射性セシウムも、放出されていることがわかる。



放射性物質の降下物測定器。いまも数値が上がる月が

いったい、この状態で安全は確保されているのだろうか。

定時降下物をモニタリングしている原子力規制委員会に問い合わせたところ次のような回答があった。

「いま数値が上がっていることと、建屋カバー撤去との関係は否定できません。ただ福島第一原発で何か起きているということはなく、天候や時期によって変動があるものなので、とくに問題があるものだとは認識していません」

しかしNPO法人市民科学研究室低線量被曝研究会の瀬川嘉之氏は、こう指摘する。

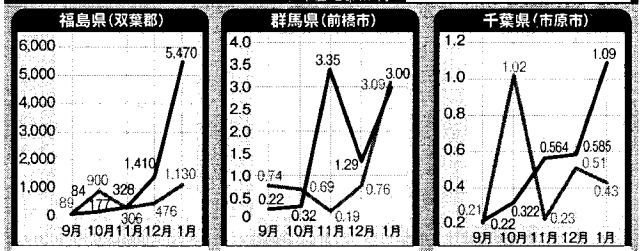
「**放射性物質に対する感受性は人によって異なりますが、確実に健康リスクが上がっていることに変わりありません。**本来なら法令で立ち入りの管理が必要なレベルの汚染があるのですから、法令に従って管理すべきです」

原発は、いまだ〝アンダーコントロール〟ではないのだ。

1号機は建屋が撤去され"丸裸"に。奥は2号機の建屋（東京電力のライブカメラ映像より）

放射能が降りそそぐ「月間降下物」調査リスト

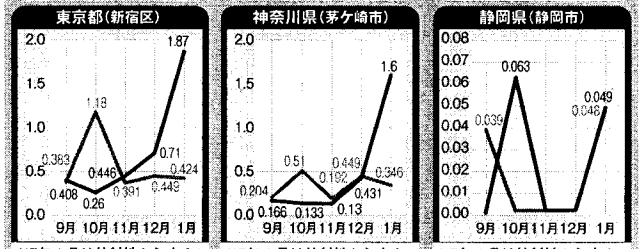
単位：Bq/㎡・月　— 2016年9月～2017年1月　— 2015年9月～2016年1月



'17年1月は放射性セシウム134が770、放射性セシウム137が4,700で合算5,470。'16年9月の放射性セシウム134が13、放射性セシウム137が71と合算84に比べると約65倍になる。

'17年1月は放射性セシウム134が0.4、放射性セシウム137が2.6で合算3。'16年9月の放射性セシウム134は不検出、放射性セシウム137が0.22で合算0.22に比べると約13倍に。

'17年1月は放射性セシウム134が0.14、放射性セシウム137が0.95で合算1.09。'16年9月の放射性セシウム134は0.03、放射性セシウム137が0.19で合算0.22に比べると約5倍に。



'17年1月は放射性セシウム134が0.27、放射性セシウム137が1.6で合算1.87。'16年9月の放射性セシウム134は0.078、放射性セシウム137が0.33で合算0.408に比べると4.5倍に。

'17年1月は放射性セシウム134が0.2、放射性セシウム137が1.4で合算1.6。'16年9月のセシウム134は0.036、セシウム137が0.13で合算0.166に比べると約9倍になる。

'17年1月は放射性セシウム134が不検出、放射性セシウム137が0.049で合算0.049。'16年9月の放射性セシウム134、放射性セシウム137ともに不検出なので比率は表せない。

出典：原子力規制委員会の環境放射能水準調査結果（月間降下物）による。
検出下限値は都道府県によって異なる。数値の単位はすべてBq/㎡

取材・文／和田秀子　原発事故以降、子供の被ばく問題を中心に取材・執筆を続けている。'12年4月に子供たちを被ばくから守ろうと立ち上がった女性たちと季刊誌「ママレボ～ Moms'Revolution」を創刊。